

# 親 鸞 思 想 の 解 明

日 時： 7月 休講

(会 場) 8月 休講

第130回 9月 4日(金) 17:30~19:30 東京国際フォーラムG棟502

※ご参加の予約は不要です。(17:00~から受付)

なお、満席の場合には先着順となりますのでご了承ください。(定員：80名)

※会場案内図は裏面をご覧ください。

講 題： 浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

講 師： 親鸞仏教センター所長 本多弘之

テキスト： 『真宗聖典』〈ご希望の方は、東本願寺出版(下記)までご注文ください。〉

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

●インターネットでの書籍のお求めは、

URL <http://books.higashihonganji.or.jp>

TOMOぶっく

検索

click

聴講料： 無 料

※ 講義(問題提起)後、ご参加の方々との質疑応答の時間を設けております。  
お気軽にご参加ください。

## 講座開設の趣旨

現代文明の溢れる人間社会を<sup>あふ</sup>生きているものにとって、入手できる情報の範囲はずいぶん広がってはいる。しかし、生まれてから死ぬまで、それぞれの人が与えられる自己の状況に、自分自身が納得し、<sup>うなず</sup>こころから領けるかというなら、決してそうではない。一般的な条件と、ことさらに自分に起こってくる事件や事実との間には、どう考えても不条理だとしか考えられない落差が出てくるからである。その落差を、<sup>しゆくごういんねん</sup>仏教的表現では「宿業因縁」と教えるのであるが、この宿業因縁を自己に必然の事実であると引き受けることは容易ではない。

その落差の条件を<sup>ひ ゅ</sup>比喩的に表現するなら、「届かない<sup>かなた</sup>彼方」とか「見えざる背景」とか、あるいは「自己に<sup>ごうほう</sup>負荷されている祖先の業報」というのであろう。これは、<sup>ふんべつ</sup>理知分別の計数には決して翻訳できない人間の条件なのである。しかもそれが、現実のわれらの生存を厳粛に規定している。この宿業因縁の圧迫から解放しようとする要求が、「浄土を求めさせる要求」の深みにあるのではなかろうか。

本多弘之

主 催： 親鸞仏教センター (真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目19-11

TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901

E-mail [shinran-bc@higashihonganji.or.jp](mailto:shinran-bc@higashihonganji.or.jp)

URL <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://www.facebook.com/shinran.bc>

親鸞仏教センター

検索

click

# 空しく過ぎるひとなし

必ず往生するぞと信ずるのではなくて、『無量寿経』で語っている往生するということは、浄土に生まれたら正定聚だと語っているわけですから、正定聚を現生で得るということは、浄土に生まれた功德を得るということです。そういう出遇いをしなければ、親鸞聖人が言うお言葉にふさわしいとは言えないわけです。それはなかなか大変なことです。それでも親鸞聖人は、やはり煩惱の身、無慚無愧の身であると、そう言うのです。それと何ら矛盾しないはずなのです。そのくらい阿弥陀の光が明るいことを実感しておられるわけです。

これが若い頃はほとんどわからなかったですね。この歳になってわかるかという、相変わらず何だかちょっとわからないのですけれども、それでも親鸞聖人がおっしゃる本当の信念の内実というものに近づいてみたいという思いがあるものだから、この人生で満足成就したと言える、そういう思いが本当に与えられるのならば出遇ってみたいと思うのです。金子大榮先生はそれを言うておられました。自分の人生は完全燃焼の人生でしたと。あそこまではなかなか言えませんが、少なくとも親鸞聖人は、心は愚かである、そして光は十分に与えられてある、自分の煩惱からは見えないけれど、向こうは見てくださっていると信ずるのだと。願力に遇いぬれば空しく過ぎる者はないと頂かれたということは、こういうことなのです。不思議な言い方だと思うのです。

(『親鸞仏教センター通信』第73号(第126回「親鸞思想の解明」)より)

## 会場案内図



●JR 有楽町駅より徒歩1分

## 東京国際フォーラム

東京駅より徒歩5分(京葉線東京駅と地下1階コンコースにて連絡)

●東京メトロ有楽町線 有楽町駅と地下1階コンコースにて連絡